

【研究ノート】

保育所・幼稚園における活動分析研究の総括 —授業研究方法の意義—

池野 範男*1・笠井 利恵*2・山根 悠平*3

*1 元日本体育大学

*2 日本体育大学大学院教育学研究科博士後期課程

*3 日本体育大学

本共同研究の目的は、問いの提出による子どもの思考の深化によって、保育における子どもの発達と深い学びを新たに見つけ出すことにある。そのために、学校教育においてよく使われる授業研究の方法を、保育所・幼稚園の活動分析に適用する。これまで連続して示してきた3編の先行共同研究論文では、研究の目的を説明し、保育の領域「人間関係」、「環境」、「健康」の3つの領域から、DVDに収録された代表的な活動事例を、授業研究という研究方法を用いて分析した。その分析では、活動をいくつかの部分で構成し、各活動構成の構造を究明した。保育の実際場面の活動を授業研究・分析の方法に基づき解明すると、子どもたちの発言や行動の深い学びを見つけることができることを示した。

この結果から、学校教育の授業研究を保育所・幼稚園という保育における活動分析に適用することができ、また、保育の活動における子どもの学びを取り出すことができることを明らかにした。

キーワード：保育，学校教育，授業研究，活動分析，深い学び

Summary of Activity Analysis Research at Daycares and Kindergartens: The Significance of Research Method on Lesson Study

Norio IKENO*¹, Rie KASAI*², Yuhei YAMANE*³

*¹ Former Professor, Nippon Sport Science University

*² Graduate Student of Doctor Course, Graduate School of Education

*³ Nippon Sport Science University

The purpose of this joint research is to newly identify the development and the depth of learning of children in childcare by deepening their thinking through the submission of questions. For this purpose, the authors apply the lesson study method, commonly employed in school education, to the activity analysis of daycares and kindergartens. In the previous three reports of this joint research, authors explained the purpose of research and used the lesson study method in the three areas of childcare, “human relationship,” “environment,” and “health,” to perform an analysis of representative activities in these areas recorded on DVDs. In the analysis, authors viewed the activities to be composed of multiple constituents, and identified the structure of individual constituents. This demonstrated that the examination of activities in childcare practice using the lesson study/analysis method allows us to identify the deep learning in children’s words and actions.

These results demonstrated that the lesson study method used in school education can be applied to activity analysis in childcare at daycares and kindergartens, and extract children’s learning in childcare practice.

Keywords: day-care, school education, lesson study, the field “human relationship”, “environment”, “health”, deep learning

1. 本共同研究の目的と本稿のねらい

本共同研究は4編の研究論文で構成されており、研究の対象を保育所・幼稚園における保育活動とし、この保育活動に対して学校教育によく用いられる“授業研究”を適用した。保育の活動内容に対して、授業研究の研究構成において用いられる“構成と構造”を分析方法として応用し、その保育活動における学びとその質に関して探求し意義づけることを課題としていた。

本共同研究の筆者たちは先の論文として、池野・笠井・山根(2020)、山根・笠井・池野(2020)、笠井・山根・池野(2021)の3編を提示した。本稿ではこれらの研究を踏まえ、その結果をまとめ、本共同研究の意義を明らかにする。

本稿は、本共同研究のねらい(目標)を確認した(2.1)のちに、3つの共同研究論文で取り上げた保育の領域「人間関係」「社会性」「環境」「健康」の3領域で、授業研究という研究方法を用い、DVDに収録されていた各領域の代表的な活動の研究方法を再確認し(2.2)、それぞれの領域の研究結果を総括するとともに、その保育活動上の意味を考究し(2.3)、その領域の保育活動を授業研究の観点から意義づけることにする(2.4)。

2. 本共同研究の総括

2.1 本共同研究の目的

教育は学習者に学びを作り出す。その学びは学習者にとって、より大きく、かつ、適切になされることが望ましい。このことは、学校教育においても保育活動においても同様である。

学びが適切になされたかどうかは、結果において判断されることがほとんどであるが、学びの過程は結果からは判断できない。教育にとって学びの適切性は、学びの計画、とくに、その構成および構造にも委ねられている。

教育の学びは、学校教育のほか、保育、成人教育、社会教育など、それぞれの教育で、取り上げられる。教育には、それぞれの対象があるだけでなく、研究の方法、教育の方法も異な

り、それぞれの独自性により、より効果的なものを追究している。

本共同研究は、保育と学校教育との交流を促進することを目指し、学校教育でよく使われる授業研究を保育活動の研究方法として用いる。

保育研究は多様になされ、長年の蓄積があり、その成果がまとめられている(例えば、日本保育学会編(1997)、無藤(2003)、中坪(2012, 2017)、西岡(2014)、小川(2014)、参照)。これらの成果は第一論文で取り上げ、まとめている(池野・笠井・山根 2020, pp.317-322, 参照)。そのまとめとして、「保育の教育研究では、一方で保育内容の領域を主にして進められているが、他方で教員養成教育の立場や保育内容の領域的取り扱いに偏していること、また、研究と実践の協働、さらには、保育実践の質的研究の充実が課題として示されている」と総括している(池野・笠井・山根 2020, p.320)。

授業研究は、レッスン・スタディとも呼ばれ、学校教育における学習活動分析には、よく使われる(稲垣・佐藤(1996)、秋田(2006a, 2006b, 2007)、日本教育方法学会編(2009)、關(2017)、吉崎監修(2019)、参照)。

本共同研究では、この授業研究を保育活動分析のための方法として用い、授業研究で用いられる構成と構造という分析方法によってその保育活動を解明し、その活動における各部分とその関係、また各活動の組織化とその在り方、教育的意義と課題を考察することにした(池野・笠井・山根, 2020, pp. 322-323, 参照)。

2.2 保育の3つの活動領域とその研究方法

本共同研究において分析した保育活動は、アローウィン社が大学の保育者養成教育用に保育園における保育活動をDVDに収録したものである。DVDに収録されている保育活動を活用した理由には3つある。

第1は、研究対象上の理由であり、DVDならば、研究対象となる保育活動を誰もが観察し見ることができることである。授業研究や保育活

動研究の多くは、各研究者が利用しやすく、研究機関のつながりや研究仲間である教育現場を選択し、その活動を対象にすることが多い。これは現実的には、無理からぬことである。どの保育所どの幼稚園にも研究者が自由に見学に行けるわけではなく、たいていは見学許可を得て保育活動を観察している。どうしても、それぞれの保育所・幼稚園の保育活動にはそれぞれの教育方針があり、その教育に傾向がある。本DVDシリーズもその傾向があるが、DVDだと、だれもがそれを観察し分析することができる点で、利点がある。

第2は、研究方法上の理由である。DVDならば、ビデオ録画同様、だれもが何度も再生可能でありその教育活動を巻き戻し検証することができることである。学校の授業研究でも、その時、教室の授業そのもの、生の授業を見学し観察する。そのため再生し、検証することはむずかしく、1回限りであることが大半である。ビデオやDVDにその授業や活動が収録されていると、誰もがいつでも、何度も自由に見ることができ、DVDに収録しているものは、教育者も研究者も誰もがその保育活動を見て観察し、いつでも、何度も分析・考察することができる。

第3は、現実的理由であり、保育所・幼稚園を訪問しその教育活動を見学することがコロナ禍により、難しくなったことである。

以上の3つの理由から、アローウィン社の『保育』シリーズを取り上げた。本シリーズは、幼稚園教育要領が示す5領域（「人間関係」、「環境」、「健康」、「言葉」、「表現」）のうち、「人間関係」、「環境」、「健康」、「言葉」の4つの領域を取り上げている。「表現」は、他の領域と結びついたものとの理解の上で、4つの領域の目的とねらいを達成するために、各園、保育者が、また、子どもたちがどのような活動や取り組みをしているのかを各園の実践事例に基づき、例示的にその活動場面を示し解説している（アローウィン、2019, pp. 5-28, 参照）。

各領域の保育活動として取り上げられている教育活動のいずれも暗黙的に、DVDの制作・監修者による、保育活動として教育的意義があると考えられている。

先の3つの共同研究論文では、①そのDVDがどの領域のどのような場面を取り上げたかを説明し、②その場面における保育活動を授業研究の研究方法に従い、構成と構造に整理し、③その保育活動に関する基本のしくみを発見しその意義づけを行った。次の項では、これらの点を、各共同研究論文にもとづき再整理し、取り上げた領域のその保育活動における価値と重要さを再確認する。

2.3 3つの保育活動研究の結果

第一論文（池野・笠井・山根、2020）では、①DVDの領域「人間関係」を取り上げ、社会性に関する一単位の活動を分析した。その活動は、トラブル場面における保育者と子どもたちの活動である。それは、保育室の後ろに座っていた女の子（G1）と男の子（B1）がケンカし、女の子が泣き、保育者のところに行き、訴えるという場面である。

②その場面における保育活動を授業研究の研究方法に従い、次の表1のように、トラブル場面の構成と構造として整理した（池野・笠井・山根、2020, p.326）。

表1 第一論文における構成と構造（筆者引用）

場面	動作・行動	構成	構造
1	「B1がG1をたたいた。」	問題場面発生	考える場面の設定
	「パンチしてよかったのかなあ。」	問いの提出	
2	問題現場への移動	状況確認	問題とその回答づくり
	場面再現 「どうすれば	問いの確定	

	よかったか」		
	パンチではなく、お口で伝えることとその理由	適切な行動とその理由 説明	
3	B1とG1の握手＝仲直り	よりよい関係づくり	関係づくり

場面 1～3 は、考える場面設定→問題とその回答づくり→関係づくりの 3 つからなっている。

③上の表 1 とその構成と構造から、場面 1～3 が、考える場面設定、問題とその回答づくり、関係づくりの 3 つからなっていること、その場面は、問いと答えの問題解決的活動で構成されており、小学校の教科の学習と基本構成が同様である。しかし、当事者間において問いと答えの学びの活動は成立しているが、クラス全体、あるいは、隣にいた子どもたちにおける学びはどこまで成立しているかは不明であった。

第一論文におけるこれらは次の分析結果と、その教育的意義にまとめた。

分析の結果、学びの活動場面は、保育者の判断により、子どもたちの学びとして作り出され、活動場面では、保育者が問いを提出し、その問いに子ども(たち)が答えることでより深くなされる。

すなわち、教育的意義は、学校教育と同様、保育においても問いとそれへの答えの問題解決的活動によって、学びの活動がなされること、また、保育活動は、保育者の場面把握によって進められ、子どもの学びは保育者の教育力に左右されることである。これら 2 つを教育的意義とし、併せて結論付けた。

第二論文(山根・笠井・池野, 2020)では、①遊ぶ複数の幼児に対して、保育者が幼児に話かけ、近くにあるピーマンが食べられるかどうかを考えさせる場面である。

②ピーマンの大きさと食事という関連だけでなく、栽培・収穫という行為と食事という行為を人間の営みということにおいて関連付けたい

という保育者の意図が込められている。

この場面を事例 1 として取り上げ、その場面の構成と構造を分析した。その整理表が、表 2 である(山根・笠井・池野, 2020, p.340)。

表 2 第二論文の事例 1 における構成と構造(筆者引用)

場面	様相・援助	構成	構造
比較	「ピーマン大きくなって？」	問いかけ	保育者からの問いかけによる比較
	「ピーマンだ、いぶ大きく…」	問いかけに対する応答	
	「またグリーンとおっきくなるから。」	応答に対する説明	
関連付け	「食べれるかな？」	問いかけ	保育者からの問いかけによる関連付け
	「うん。」	問いかけに対する応答	

表 2 の構成と構造から、第二論文で取り上げた事例 1 の学習は、幼児の比較・関連付けであり、まず保育者が問いを幼児に発することで、幼児の比較・関連付けを促進するように働きかけている。

③幼児は日常生活において、自然を対象とした比較・関連付けができるが、必ずしも自覚したり、できていたりすることはない。しかし、無自覚ながら、このような比較・関連付けがさまざまなものに適用され育成されていく。その育成には、保育者が幼児に問いかけ、幼児が比較・関連付けを行うという場面づくりとそこにおける学びが重要であることを示している。

第二論文の考察の結果、栽培している植物や幼児が発見した虫に対して、それらの大きさや

数について比較・関連付けている場面が見られた。また、保育者は栽培している植物の大きさや食事との関連に着目するといった比較・関連付けに関する問いかけを幼児に行っていた。さらに、2つの事例の構成と構造から、幼児の比較・関連付けは、保育者による問いかけから行われる場合とともに、幼児が自発的に行ったりする場合もあることが明らかとなった。

事例分析の結果、教育的意義として、学びをより充実させるためには、保育者が比較・関連付けを行う箇所、場面の意識的な支援と援助が重要であることを明らかになった。

第三論文（笠井・山根・池野，2021）では、①1歳児と5歳児の遊びの場面などを取り上げて考察した。これらは、幼児の真似のしぐさの学びであり、友だちのしていることを真似したりそれに影響されたりする事例である。

②その構成と構造を、表3として整理した（笠井・山根・池野，2021，p.34）。表3に整理された保育活動は、幼児の遊びにおけるごっこ遊びの活動であり、その構成は、反映模倣、見立て・声掛け、保育者の参加である。また、それぞれの構成をまとめた構造は、他者の模倣→動作の模倣→遊びの共有の3つに分けることができた。

表3 第三論文の事例における構成と構造（筆者引用）

場面	様相	構成	構造
1	C6がC1を見て、玩具をカゴに入れる	反映模倣	他者の模倣
2	C3の食べる仕草	見立て	動作の模倣
3	C4の電話をかける仕草		
4	C5がおたまでかき混ぜる		

	T「あ、お弁当はいつているね」	声掛け	
5	保育者がおたまでに玩具をいれ、C2がボウルへ移す	保育者の参加	遊びの共有

さらに1歳児と5歳児の2つの事例の構造には、いずれも「他者の模倣」と「遊びの共有」が共通している。どちらも他者との関係の中で行われるものである。「他者の模倣」の実態は、1歳児の事例に関しては一方的に真似する反映模倣、5歳児の事例では相互に真似し合う相互模倣である違いがあったが、いずれも友だちを模倣するものであった。

③この事例から、ごっこ遊びは保育者や友だちと触れ合う安定感の中で、様々な活動に親しみ楽しみながら、遊びを通して食事や衣服の着脱などの生活習慣に触れることのできる活動である、ということが示唆された（笠井・山根・池野，2021，p.38）

第三論文の研究で取り上げた事例は、いずれも室内であった。学校教育における体育科を見据えた領域「健康」という点からそのつながりを考察すると、自らの健康に関心を持ち、安全に配慮しながら、体を十分に動かして戸外で行う遊び方に発展させられるような支援を検討することが必要であると示唆された。

また第三論文において取り上げ分析した2つの事例と保育の領域「健康」とを比較照合した結果、「体育科を見据えた領域「健康」という点から、自らの健康に関心を持ち、安全に配慮しながら、体を十分に動かして戸外で行う遊び方に発展させられる」という（笠井・山根・池野，2021，p.39）教育的意義を見出した。また、そのような意義を有効にするためにも、保育活動でよく見られるごっこ遊びは、保育者や友だちと触れ合う中で、生活習慣に触れることのできる有効な活動であることを究明した。

以上において、アローウィン社の『保育』シリーズ DVD に収録されていた保育活動を事例に、保育活動分析を進めてきた3つの先行論文(池野・笠井・山根, 2020; 山根・笠井・池野, 2020; 笠井・山根・池野, 2021)にもとづき、保育活動、その構成と構造、その教育的意義を再整理した。

2.4 保育活動研究における授業研究の意義

本共同研究は、DVD に収録されていた保育活動を事例に、授業研究の手法を用い、保育活動を分析し、その教育的意義を解明することであった。

各論文では、収録された保育領域「人間関係」「社会性」, 「環境」, 「健康」の3領域で取り上げられた保育活動に関して授業研究という研究方法を用い、その活動を分析し、教育的意義を探究した。

一単位の保育活動を、授業研究の研究方法に従い、発言活動の記述をもとに、その活動がどのような構成で成り立ち、どのような構造になっているのかを追究した。その追究を構成と構造と表現し、上述の表1-3に整理した。

この各表こそが、授業研究における重要なポイントである。活動を指導する教師と学ぶ子どもたちの場面とその活動に整理し、その整理を時間経過に従いいくつかの場面(まとまった活動)とその関係を解明した。

表1-3はその成果である。これらの3つの表から言えることは、次の3つにまとめることができる。

(1) 活動のはじめは、子どもたちの活動とそれへの保育者の問いかけとなっていることである。学校教育の授業では、前時とのつながりは意識されるものの、いきなり、問い(学習問題)が提示されることがある。しかし、保育活動はそのようなことはなく、必ず子どもたちの活動を促しつつ、その活動の中に課題や問題を保育者が見つけ、問いかけるものとなっている。

(2) 活動の中盤は、多様であるが、一種の問

題解決的活動になっていることである。人間関係では、パンチの問題の良し悪し、環境では、ピーマンの成長、健康では、ごっこ遊びがテーマとなっている。そのテーマに関する問題、たとえば、パンチはよいのか(許されるのか)、大きくなったピーマンは食べられるのか、ごっこ遊びはどのように進展するのかであり、活動とともに、これらの問題を作り出し、子どもたちが考える、という問題解決的活動となっていることである。

(3) 活動の終末には、関係する子どもたちが共有するものとなっていることである。子どもたちがあれこれと活動したり、考えたりするが、関係する子どもたちが問いの答え、また活動の総括として特定のものに行き着くものとなっている。

これら3つの特質は、大きくは、問題解決学習、問題解決的活動の特徴を示すものである。この点から、総括的に言えることは、問いの提出による子どもの思考の深化、つまり、問題解決的活動によって、保育における子どもの発達と学びの豊かさを新たに作り出すことができる、ということである。

3. 本共同研究の結論と課題

本共同研究の目的は、問いの提出による子どもの思考、その深化によって、保育における子どもの発達と深い学びを新たに見つけ出すことであった。そのために、学校教育においてよく用いられる授業研究の方法を、保育所・幼稚園の保育活動の分析に適用した。これまで連続して示してきた3編の本共同研究(池野・笠井・山根, 2020, 山根・笠井・池野, 2020, 笠井・山根・池野, 2021, 参照)では、研究の目的を説明し、保育の領域「人間関係」「社会性」, 「環境」, 「健康」の3領域で、授業研究という研究方法を用い、DVD に収録されてきた3つの領域の代表的な活動を分析した。その分析では、活動をいくつかの部分で構成し、各活動構成の構造を究明した。保育の実際場面の活動を

授業研究・分析の方法に基づき、構成と構造という活動の分節化とその関係を解明すると、子どもたちの発言や行動の深い学びを見つめることができることを示した。

この結果から、学校教育の授業研究を保育所・幼稚園という保育における活動分析に、学校教育の授業研究の方法を適用することができ、また、保育の活動における子どもの学びを取り出すことができるとともに、より深化した過程（プロセス）を取り出し、意義づけることを明らかにした。

研究対象とした DVD シリーズには、「言葉」もある。この「言葉」は本共同研究者たちの専門領域との関係で本共同研究では取り上げることができなかった。近い将来に、その領域の新たな共同研究者を募り、同様な方法で、研究を進めたいと計画している。

参考文献

秋田喜代美編（2006a）『授業研究と談話分析』放送大学振興会。
秋田喜代美（2006b）「授業研究の展開」秋田喜代美編『授業研究と談話分析』放送大学振興会，pp.22-36。
秋田喜代美（2007）「授業研究の新たな動向：「実践化」の視点から」『日本家庭科教育学会誌』49(4)，pp.249-255。
アローウィン（2016）『子どもの社会性を育てる～保育現場に見る「保育・人間関係」～』アローウィン（DVD）。
アローウィン（2019）『アローウィン DVD カタログ（映像教材）2020年版』。
池野範男・笠井利恵・山根悠平（2020）「保育所・幼稚園における活動分析—活動の構成と構造—」『日本体育大学大学院教育学研究科紀要』3(2)，pp.315-334。
稲垣忠彦・佐藤学（1996）『授業研究入門』岩波書店。
笠井利恵・山根悠平・池野範男（2021）「保育の領域「健康」における活動分析—幼児のご

っこ遊びに着目して—」『日本体育大学大学院教育学研究科紀要』5(1)，pp.27-40。
河田聖良・片川智子・河合高鋭監修（2019）『保育内容：健康』アローウィン（DVD）。
松浦圭子・小林保子・河合高鋭監修（2018）『保育内容：環境～子どもの「やりたい」に応える環境～』アローウィン（DVD）。
無藤隆（2003）「保育学研究の現状と展望」『教育学研究』70(3)，pp.393-400。
中坪史典編著（2012）『子ども理解のメソドロジー—実践者のための「質的实践研究」アイディアブック』ナカニシヤ書房。
中坪史典（2017）「保育実践と質的研究：その「質」を問う」日本保育学会編『保育学研究』55(3)，pp.105-106。
中坪史典・柴山真琴・田中浩司・二宮祐子（2017）「保育フォーラム 保育学の研究方法論を考える(1)」日本保育学会編『保育学研究』55(3)，pp.105-120。
日本保育学会編（1997）『わが国における保育の課題と展望』世界文化社。
日本教育方法学会編（2009）『日本の授業研究上・下巻』学文社。
西岡けい子（2014）「保育実践のなかで子どもをとらえる」日本教育方法学会編『教育方法学研究ハンドブック』学文社，pp.326-329。
小川博久（2014）「幼児理解と教育実践」日本教育方法学会編『教育方法学研究ハンドブック』学文社，pp.322-325。
佐伯胖・刑部育子・苅宿俊文（2018）『ビデオによるリフレクション入門』東京大学出版会。
關浩和（2017）「教科教育の授業研究」日本教科教育学会編『教科教育研究ハンドブック』教育出版，pp.142-147。
山根悠平・笠井利恵・池野範男（2020）「保育の領域「環境」における活動分析—幼児の比較・関連付けに着目して—」『日本体育大学大学院教育学研究科紀要』3(2)，pp.335-344。
吉崎静夫監修・村川雅弘・木原俊行編（2019）『授業研究のフロンティア』ミネルヴァ書房。